



中国がわかるシリーズ 29 唐の衰亡(前)

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

840 年に即位した唐の 15 代、武宗(～846)は、道教に入れあげ、3度目の廃仏令を出しました。唐の皇室は、李耳(老子)を祖先と称していたので、道先仏後という原則に則り、道教を保護はしていましたが、唐は世界帝国として、あらゆる宗教に門戸を開いていたはずでした。しかし、中唐、晩唐と国勢が衰退するにつれて、唐の寛容性にも限界が生じていたのでしょう。

この時は、仏教だけではなく、キリスト教(ネストリウス派、景教)、ゾロアスター教(祆教)、マニ教などの外来宗教も弾圧され、中国から姿を消しました。特に、マニ教はウイグル人の宗教であったため、ウイグルに圧迫されていた反動が一挙に現れたと思われます。

838 年の遣唐使に従って入唐していた円仁(慈覚大師)は、詳細な記録をしたためていました。円仁の「入唐求法巡礼行記」は「大唐西域記」や「東方見聞録」と並ぶ東アジア 3 大旅行記の1つです。

中唐では、詩人の白居易、楷書の最高峰の1人、顔真卿、茶経を著した茶聖、陸羽、六朝以来の華やかな四六駢儷体を批判して、古文復興運動を興した韓愈や柳宗元が出ました。「国力がピークをつけた後、文化の爛熟が訪れる」という原則はここでも生きていたのです。

875 年、黄巢(塩賊、塩の密売人)の乱が起こりました。中国の闇社会の淵源とされる塩賊は、地下に強固なネットワークを築いており、山東からスタートした黄巢軍は、根拠地を持たないまま、広州から長安へと、毛沢東の紅軍も顔負けの大長征を敢行しました。

唐室は、安史の乱同様、四川の成都に難を避けました。沙陀族の李克用や、寝返った黄巢の将、朱温(唐から全忠の名を授けられる)の活躍もあって、884 年、黄巢の乱は平定されましたが、唐は、嘗ての[東]周のように、実質的には首都の近郊を領有するだけの政権に成り下がってしまいました。